

# 柳生の観光資源と観光振興に関する調査研究

研究代表者：志村 和佳菜

共同研究者：青野 絵菜 松駿 佑 一見 桃枝

1. 研究の目的
2. 観光資源分類法の考察
3. 柳生の観光資源分類と分類からみる観光資源の特徴
4. 柳生一族と柳生地区の歴史
5. ストーリーの設定と観光振興の提案

## 1. 研究の目的

本研究は奈良市柳生地区を事例として、観光資源分類により観光資源の特徴を明らかにし、さらに柳生の歴史や文化に関する文献調査や観光資源の現地調査から柳生のストーリーを設定し、ストーリー性のある観光振興を考察するものである。

研究は以下の手順で進めた。①観光資源について文献研究を行い、分類枠組みを設定する。②分類枠組みに基づき、柳生の観光資源を分類しその特徴を明らかにする。③柳生の歴史に関する文献調査を行う。④文献調査や観光資源調査の結果から、柳生のストーリーを設定し観光振興を提案する。

## 2. 観光資源分類法の考察

柳生地区の観光資源分類を精緻化し観光資源の特徴を明らかにするために、まず新たな観光資源分類法を検討する。

須田（2003:49）は下図のように観光資源を分類している。

	有形観光資源	無形観光資源	総合観光資源
自然観光資源	<ul style="list-style-type: none"> <li>・温泉</li> <li>・海(岸)、河川(湖沼)、山岳(高原)</li> <li>・動植物</li> <li>・天体</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然現象(不知火、曇気楼、オーロラ)</li> <li>・気象(雨、雪、四季)</li> <li>・音</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然公園(国立公園、国定公園、府県立自然公園)</li> <li>・動物園、植物園、水族館</li> <li>・風光</li> </ul>
歴史文化観光資源	<ul style="list-style-type: none"> <li>・建造物</li> <li>・史跡(遺跡、城郭、古墳)</li> <li>・美術工芸(陶磁器、絵画、彫刻(仏像)、古文書)</li> <li>・有形民俗文化財</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・無形文化財(音楽、技術、民話、能楽、演劇)</li> <li>・無形民俗文化財</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・神社寺院(庭園)</li> <li>・美術館、博物館(記念館)</li> <li>・テーマパーク</li> </ul>
複合観光資源			<ul style="list-style-type: none"> <li>・都市、農村(景観)</li> <li>・リゾート</li> </ul>

図 1

出典：須田 寛（2003:49）

まず、自然観光資源と歴史文化観光資源に二大別しており、横軸には有形観光資源・無形観光資源・総合観光資源の категорияに分類している。

自然観光資源と歴史文化観光資源の二大別の根拠として、須田は「観光対象が観光する人の観光意思を持った働きかけ（観光行動）によって初めて観光資源になる」という考え方をとっているためであると述べている。（須田 2003:34-5）自然観光資源と歴史文化観光資源は本来、観光のために存在しているもの、観光を意図して作られたものではないことが多く、これらに観光客から観光意思を持った働きかけをすることで観光資源になる。そして、本来自然観光資源は「自然現象として自然発生的に存在するもの」であり、歴史文化観光資源も、例えば「社寺、ないしはそれに収蔵される仏像なども宗教上の目的でつくられたもの」であり、「文化財についても、人間の文化的、芸術的行動の所産」である。（須田 2003, pp.35-6）自然観光資源と歴史文化観光資源の本来の性格も、このように大きく異なるため、自然観光資源と歴史文化観光資源に二大別している。

須田の分類方法について、図2のように観光資源分類図を改定した。

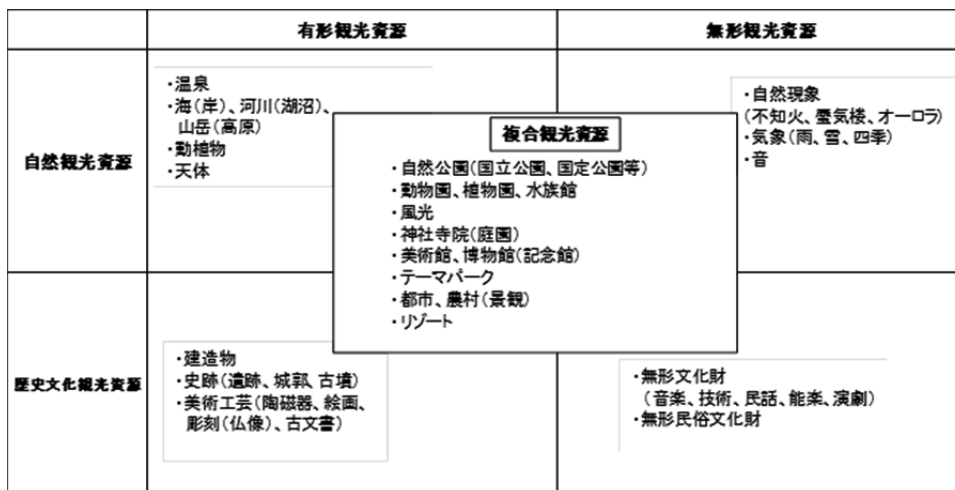


図2

須田の分類図では、有形観光資源と無形観光資源の二つの要素を含む総合観光資源と、自然観光資源と歴史文化観光資源の要素を含む複合観光資源が提示されていた。しかし、総合観光資源や複合観光資源は、自然観光資源、歴史文化観光資源、有形観光資源、無形観光資源のすべての要素を含んでいるものであると考える。そのため、総合観光資源も複合観光資源として一つのcategoryとしてまとめ、有形・無形、自然・歴史文化のすべてを含むことを表すために図の中心部に配置した。

### 3. 柳生の観光資源分類と分類からみる観光資源の特徴

図2の新たな観光資源分類法をもとに、柳生の観光資源の分類を行った。

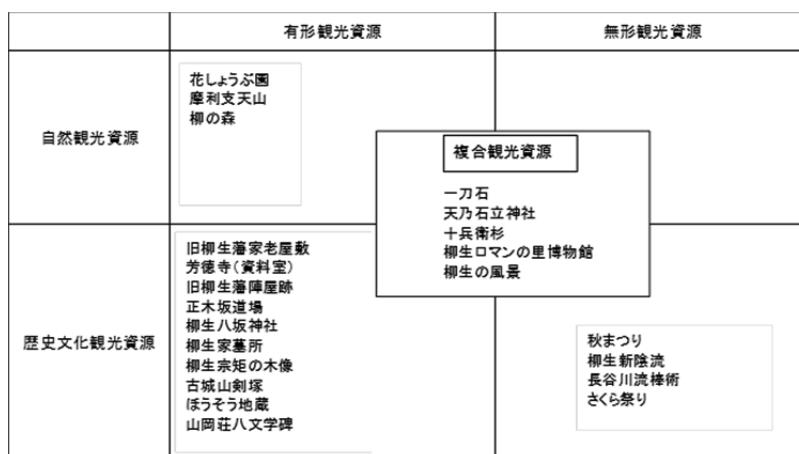


図3

この観光資源分類図から、柳生地区には歴史文化的な有形の観光資源が多く存在することがわかる。そしてこれらの歴史文化観光資源の多数は、柳生一族に深い関わりを持つ資源である。またほうそう地蔵や秋まつりなど、長い歴史を持つ柳生の住民の歴史文化を表す資源も存在する。

観光資源分類図を通して柳生の観光資源を整理すると、柳生一族との深い関連のある歴史文化観光資源が多いということが明らかになった。この事実から、柳生一族の歴史文化が柳生の魅力ではないかと考えられる。次章では、柳生観光におけるストーリーを構築するために、柳生の観光資源と深く関連する柳生一族の歴史について整理する。

### 4. 柳生一族と柳生地区の歴史

江戸柳生家に伝わる『玉栄拾遺』によると、柳生一帯は、古くから大柳生庄・坂原庄・小柳生庄・邑地庄から成る“神戸四箇郷”の一つであり共に藤原氏の荘園であったが、1038年関白藤原頼通がこれらの土地を藤原氏の氏神である春日大社に寄進したと伝わる。この春日大社への寄進と同時にそれぞれ地頭職が置かれたが、そのうちの小柳生庄を領した大膳永家が柳生家の始祖であるとされる。

その大膳家＝柳生家の名が歴史上に初めて上がるのは、永家から数代を経ての播磨守永珍の代である。鎌倉幕府と後醍醐天皇の対立による「元弘の役」での活躍がそれである。

いわゆる天皇親政の「建武の中興」を目指す後醍醐天皇は京を脱出して、柳生の峰続きの笠置山に籠った。後醍醐天皇の檄に応じてその軍に加わった永珍は柳生に拠って糧食の確保に当たる一方、奈良方面からの幕府軍勢力である六波羅探題の攻撃に備えた。しかし、戦は後醍醐天皇側の敗戦に終わり、後醍醐天皇は隠岐に流され、柳生の一党もまた北条氏によってその領地を没収される。だが、その後、建武の新政により、柳生家は領地を回復する。

柳生の名が次に史上に現れるのは、1544年7月頃の「小柳生合戦」の時である。『多聞院日記』によると、柳生家敵は三好範長と管領細川晴元の臣・木津長政との争いで、木津側につき、筒井氏その他と戦ったが、戦乱の結果は木津側の敗戦となり、三好氏につながる筒井順昭に狙われ、1万余りの兵力で柳生は侵攻されることになった。順昭は忍辱山に陣を敷き、

柳生を攻めたために小柳生は3日で落ちた。家蔵、宗蔵の父子はやむなく筒井氏に従い、さらには松永弾生久秀に属することとなる。以降、柳生家の苦難の時代の始まりとなる。

戦国時代、柳生谷一郷を守る一族の苦労は並大抵のものではなかった。家蔵の長男である宗蔵（石舟斎）は、二転三転する戦乱の状況に翻弄されながらも、剣の修行に励み、徐々に戦乱の中で、その頭角を現していた。宗蔵が35歳の時、多武峰合戦では、負傷しつつも陣頭に立って奮戦し、その名を畿内にとどろかしたという。

さらに大和一国を手中に納めつつあった松永久秀の推挽で織田信長の大和侵攻の案内役を務め、信長に招かれて京都に上がり、足利幕府最後の将軍義昭に仕えて但馬守となった。しかし、信長によって足利幕府が崩壊した後は乱世に嫌気をさしたのか、47歳の時、俗世間との交流を一切絶って、1594年に徳川家康と出会うまでの20年もの間、柳生に籠ってしまった。宗蔵が、石舟斎と号したのは隠居・剃髪してからのことである。

では、その宗蔵による柳生新陰流はいつどうして生まれたのか。宗蔵は、人望厚くまた武略にも優れ、若いときから父家蔵と各地で転戦するなかで戦術や武技を鍛え、柳生の地では実戦に備え練磨に励んだと言い、新当流を神取新十郎に学んでいて畿内で早くからその武名を知られていたと伝わる。

宗蔵35歳の1563年、かねてから親交があった槍で有名な奈良宝蔵院主の覚禅坊胤栄を通じて新陰流関東一の兵法家である上泉伊勢守秀綱（新陰流の祖）を知り、2年間兵法を学んだ後の1565年4月、秀綱から“一国一人”の印可を受け、さらに翌1566年、新陰流目録すなわち「燕飛・猿回・三学・九箇」の太刀目録を伝授されたという。こうして世に言う柳生新陰流が誕生し、宗蔵はその流祖となったのである。

戦国動乱期という厳しい世の中で、長い間戦陣生活を余儀なくされた宗蔵が石舟斎と号して柳生に隠居していたが、やがて1594年に柳生一族にとっての一大快事があった。石舟斎が京都郊外の紫竹村に陣を構えていた徳川家康に招かれたのである。石舟斎はここで初めて柳生新陰流の秘法を披露し、家康からは景則（備前長船の刀工）の脇差とともに神門誓紙と二百石の知行を与えられ、名実ともに家康の家臣団の一員となった。

石舟斎の兵法の卓越さに感動した家康は、その場で誓紙を入れて入門し、自分ばかりではなく息子秀忠の師にもなってほしいと申し入れた。しかし、石舟斎は高齢を理由にそれを辞退し、たつてという家康の望みに同行した五男宗矩を家康に預けたのである。

その後、柳生家の家督は石舟斎から、宗矩へと継がれていった。その宗矩が今に伝わる功績を示すのは1600年の天下分け目の関ヶ原の戦いの時である。この前後、宗矩は常に家康の間近に持して家康の直命を受け、あちこちに使いして東軍の味方を増やした。

さらに1614年の大阪冬の陣、1615年の大阪夏の陣で功績を積んだ宗矩は、秀忠や家光の兵法師範も努め、このような出世に伴ってしだいに所領を増やしていき、ついに1636年宗矩の所領は一万石に達して大名の列に加わった。

その後、宗矩を始祖とする江戸柳生家は、柳生藩を所領する代表として江戸時代を通じて続くことになる。

そして、柳生家はここで宗矩から十兵衛三蔵の時代へと移る。数多くの剣豪小説であまりにも有名な十兵衛三蔵は、幼名を七郎と言い、祖父石舟斎に似て文武両道に優れた素質をもっていた。十兵衛三蔵は祖父石舟斎が亡くなった翌年1607年、宗矩の長男として柳生の庄に生まれた。1619年、13歳の時に後に将軍となる家光（16歳）の小姓として出仕したが、出



仕後4年目の1626年、將軍の勤氣に触れて官職を説かれ、相模國小田原に配流された。その後、武蔵国八幡山や山城国梅谷で山賊を懲らしめたことなどのエピソードが、柳生家歴代記録『玉栄拾遺』に記されているが、1638年に書院番として再出仕するまでの12年間の動向については、はっきりとわかっていない。そしてこの十兵衛の12年間の空白については、昔からおもしろおかしく書いた小説類が多く出回っている。

1638年に長旅を経て帰ってから十兵衛は再び書院番に召されながら直ちに柳生の地に戻って正木坂の「劍禅道場」を開き、1万3千5百人に及ぶ門弟を指導したともいわれている。

宗矩を初代とする江戸柳生家は、初代宗矩から四代宗在まで、江戸幕府の師範を勤めた。しかし、十一代將軍家斎以降は、將軍の相手に命ぜられる程度になり、次第にその実力も衰えていったといわれている。(柳生村史編集委員会編 1961)

## 5. ストーリーの設定と観光振興の提案

観光資源分類の結果、柳生の観光資源は、歴史文化的観光資源が多いという特徴があり、それらの観光資源は柳生一族との深い関わりを持つ、ということが明らかになった。この事実から、柳生観光に「柳生一族」のストーリーを置き観光資源を再構成し、柳生一族の歴史を巡ることができる「柳生ならではの」観光を提案することで、観光振興につなげられるのではないかと考えた。

これまでの柳生における観光振興が効果をあげていない原因の1つは、観光資源を最大限に活用できていないためであると考えられる。現在の柳生の観光資源は、それぞれ柳生一族との関係性があるにも関わらず、観光資源と観光資源の連携がとれておらず、個々が単体で存在しておりつながりが見えない。そこで、柳生に存在する個々の観光資源を単体で捉えるのではなく、それらを「柳生一族」のストーリーを用いて柳生地区の観光資源として1つにまとめ、柳生の「まち」自体の魅力を高めて、観光資源の総合力で柳生の魅力を発信していく。

このように観光に柳生一族のストーリー性を用いるためには、観光客が柳生一族の歴史をある程度学んでおく必要がある。観光客が柳生一族についての知識がなければ、柳生一族の歴史と関連している観光資源のもつ魅力を最大限に理解することが難しい。

観光客が柳生一族の歴史を知ったうえで、観光資源を見るには、柳生一族の歴史を観光客に伝える手段、例えば、観光パンフレットや観光ガイドが必要となる。また近年、観光客が観光地の情報を集める際にインターネットで調べる人が多いことから、柳生観光のHPを活用し、情報を発信することも効果的だ。

さらに、観光資源を訪れるルートが構築されていることがストーリー性を用いた観光振興を行っていくうえで重要である。まず、旧柳生藩家老屋敷には、柳生一族の歴史を知ることができる展示物が多いので、一番に訪れておくと柳生という場所がどのような所なのか理解することができる。その後、観光客は、柳生一族の歴史に沿って観光資源を巡る。柳生新陰流の流祖である石舟斎が修行をしていたとされる一刀石から、石舟斎の菩提を弔うため宗矩が創建した芳徳寺、そして十兵衛が開いた正木坂剣道場というように柳生一族のストーリーに沿って柳生を巡る。柳生家の長い歴史を順番に辿っていくことで、柳生一族の歴史を深く学ぶことができる。

ストーリーを用いた観光振興といっても、観光資源をただ見て回るだけでは観光客は高い満足度を得ることはできない。現在では「見る」だけではなく、その場所でしかできない「体

験」を観光に取り入れることが、観光満足度を上げるためには必要である。この「体験」にも、柳生のストーリー性を取り入れるべきだ。例えば、正木坂剣道場で柳生新陰流の体験をしたり、柳生に古くから伝わる柳生焼きの陶芸体験をしたりと、柳生でしかできない「体験」を観光に取り入れる。他にも、柳生でつくられた野菜を使った食事を提供するの也不错。「見る」だけでなく、「柳生ならではの」体験ができるような観光が求められる。

そして、観光客に「もう一度来たい」と思ってもらえるような、リピーターを獲得する取り組みも必要だ。柳生では春は桜が美しく咲き、桜祭が開催され、6～7月にかけて柳生花しょうぶ園が開園、秋から冬にかけて柳生を囲む山々が綺麗に紅葉する。このように柳生の自然観光資源は季節に応じて様々な魅力をもっており、一度訪れただけでは知ることのできない柳生の魅力がある。その季節ごとの魅力をもっと発信していくべきである。それ以外にも、期間限定で柳生一族に関するイベントを開催することや、旧柳生藩家老屋敷の展示物の内容を期間ごとに変更することなど、柳生観光に変化をつけることで、一度来ただけでは分からない魅力を知ってもらえるような工夫をすることも必要だ。

柳生は、多くの魅力的な観光資源を有しており、現在はそれらの魅力を十分に観光客に伝えることができていないが、個々の観光資源を柳生一族のストーリー性によって1つにまとめ、柳生の魅力をまち全体で楽しむことのできるような観光形態を構築することで、観光客は高い満足度を得ることができ、そして観光振興が柳生地区の活性化にもつながると考える。

## 文 献

須田寛（2003）『実務から見た新・観光資源論』、交通新聞社

奈良県史編集委員会編（1988）『奈良県史 第10巻 荘園』、名著出版

奈良県史編集委員会編（1988）『奈良県史 第11巻 大和武士』、名著出版

柳生観光協会編（2000）『新版・柳生の里 花と剣聖の里』、奈良出版サービス社